

授業公開について

文学部/山 田 忠 司

1. 公開した授業

＊科目名：「中国語文法・講読Ⅱ」

＊日 時：2009年11月12日（木曜日）3限

＊教 室：721教室

2. 授業公開に対する感想

大学で教鞭を執る人には教授法についてまったく教育を受けていない人も多く、教員免許を取得していない人も多いであろう。かく言う私もこれまで教えること自体についての授業を受けたことはない。したがってまったく「我流」と言わざるを得ない方法で授業を行ってきたのが実情である。そんな筆者にとっては他の先生に授業を見ていただき、御意見を頂く機会は貴重なものであった。また今回私の授業を参観された先生から頂いた御意見も大変参考になった。

今回授業公開したのは文学部中国語文学科における中国語の授業である。

私が特に意を用いたのは

① 本学は外国語学部ではなく文学部であり、会話運用能力の伸長に最重点を置くものではないが、音声を離れた外国語教育はあり得ないとの観点から学生に声を出させることを重視する。

② 90分の間、絶えず集中を切らさないことはかなり難しいので、内容が単調にならないようメリハリのある授業を心がける。受講者の学習活動として、板書の筆写、音読、ロールプレイ、ペアワークなどを織り交ぜ、飽きのこない授業を目指す。

③ 文法説明(教員の説明)は極力単純明快化し、学生の口頭練習の時間を可能な限り多くする。この際、文法説明における厳密な意味での正確さを多少犠牲にすることは止む無しとしている(言語である以上、例外的な現象が多く、正確さに重きを置きすぎると、学生が消化不良を起こす恐れがあるため)。

⑤ 初めて学ぶ言語であることに鑑み、受講生に中国語は易しくて、おもしろいという印象を抱かせるように努める。

⑥ 息抜きも兼ね、中国の文化、習慣も紹介するようにする。
の諸点である。これらの点は常に意識しながら授業を行っている。

具体的な授業の流れとしては

- ・前回授業時の課文をCD音声に続いて、発音を矯正し、ポイントにかかわる部分については学生に翻訳させる(これは学生が揃うまでの場繋ぎの意味と学生を中国語学習モードに変える意味を持つ)。
- ・本を閉じさせ、CD音声に続いてリピートさせる。
- ・宿題(テキスト記載の中国語作文問題を授業開始前に板書しておくことを前回の授業時に

数人の学生に指示済み)の答え合わせ。学生の間違い(漢字字体、句読点なども含め)を指摘・添削し、模範解答を示す。ここで注意しているのは作文の答えは一つとは限らないので、教員の模範解答とは異なった中国語を書いた学生がいないかを確認し、あればそれを発表させ、その可否を説明する。

- ・新しい課の新出単語の発音をチェックし、必要あれば補充説明を行う。
- ・その課の文法ポイントを説明。必要あれば、例文の補充プリントを配布。
- ・置き換え練習、転換練習により新文型の定着を図る。
- ・課文の解説および発音練習。単語文法事項は既に説明済みなので、ここでは学生に日本語訳させる。
- ・課文に習熟したところでロールプレイを5組(10人)程度にやらせる。
- ・テキスト記載の中国語作文を宿題として自宅でやることを全員に指示。一部の学生には次回授業開始前に板書しておくことを指示。
- ・学生に質問があれば、それに対応。

以上が基本ベースであり、その他に5課終了毎に小テストを実施している。その方法は5つの文章を教員が一つずつ音読し、それを中国簡体字で、書き取らせるというものである(一部単語はピンインで書かせている)。

3. 本学における授業改善への今後の取り組みに対する意見

教壇に立つ人でよりわかりやすい授業をしたいと考えない人は皆無であろう。そして各人が各人なりに色々と工夫はされているであろう。さはさりながらそこには個人の独断、思いこみなどが色濃く出ていることもまた事実であろう。更にこの変化の激しい時代にあっては学生の気質も変化が大きく、教員が自身の学生時代を思い返し、学生であればこのような知識は常識として持っているとか、あるいはこのような本は当然読んでいるといったことについても教師の認識との間に乖離が存在している。更に使う言葉(語彙)も世代によって違うのはいわば当然であり、教授者はそういった点にも気を配らなければならない。

つまり、わからないのは学生の不勉強だけが原因ではなく、教員側の認識、教授技術の問題でもあるのである。したがって他教員の授業を参観し、意見交換を通じ、その良いところを学ぶのは意義が大きい。とは言え講義系の授業において問題となるのは論理展開の方法、提示の事例の適切さなど授業内容に直接関わる点が多いので、なかなか他の教員との意見交換、授業参観などは有効に働きがたい側面がある(もちろん、レジュメ及び板書の見やすさなど純技術的な面も重要である)。

この点、外国語習得のための授業は対象語学が異なっても、その方法論は他の言語習得にも応用できることが多々あろう。筆者が担当している中国語について言えば、その教育法については種々の要因により、まったく立ち後れているのが現状である。是非、他の言語取得に関する研究成果を取り入れ、その理論、メソッドを中国語教育に応用したいと考えている。特に言語教育の最先端を行くであろう英語教育関係の知見から学ぶべき事は多くあろう。幸い本学には英語教育を専門とされる教員がかなり在籍しておられるのでその方々から学ぶ場、意見交換の機会を持てたらと希望する。

平成 21 年度 授業公開 授業計画書

2009 年 11 月 12 日(木)3 限

学部	文学部	授業者	山田 忠司		
授業科目名	単位数	講・演・実	年次	公開教室	
中国語文法・講読Ⅱ	必・選(2)		2	7 2 1	
本時の目標					
前回講義内容である中国語可能補語の復習、宿題の答え確認。 助動詞（要、想）の用法を理解する。中国語の発音はかなり難しいのでその練習も行う。 二年次からはかなり高度な中国語文章を読むことになるので、しっかり基礎を固めておく必要がある。					
本時の内容					
中国語習得を目指す講義であり、外国語運用能力を高めるトレーニングの場である。 文法事項などの説明は明瞭、簡潔を心がけ、それよりも受講生自身の耳（聴力）、口（会話力）、目（読解力）、手（作文力）の訓練を行う。					
本時の展開					
学び始めて 10 ヶ月の新しい外国語であり、まだまだ発音が不安定であるので、発音の復習をしつつ、新しい文法事項を学び、中国語の力を伸ばす。 - 前課（テキスト 35 課）の復習（宿題答え確認、本文朗読、聴解） - 本課（テキスト 36 課）の新出単語の解説 - 本課課文の解説、発音チェック					
本時の評価の視点(参観の視点)					
重要な点は受講生がどの程度「主役」になっているかである。教授者はあくまでアドバイザーでしかなく、受講生に自ら学ぼうとする意欲がなければ、それは失敗である。 従って受講生の学びたいという意欲を引き出せるかがポイントとなる。					